様式 2

令和 5 年度 東京藝術大学 未来創造継承センター
芸術資源活用プロジェクト　実績報告書

※Word ファイルで提出してください。

プロジェクトのタイトル	近代画絹の性状と編年に関する研究 −藝大所蔵絹本作品のマイクロスコープ調査を通して−	
実施責任者（申請代表者）	氏名	所属／学年／役職 （所属がない方は未記入）
	京都絵美	嵯峨美術大学准教授
実施期間	令和 5 年　4　月　1　日　～　　6　年　3　月　31　日	
実施内容 ※申請書の「プロジェクトの概要」や「実施計画・方法」に記載した内容について、実際にどのようなことを実施したのかについて記載。 （500～600 字）	東京藝術大学大学美術館所蔵の下記 18 作品の画絹について、織密度、絹糸の形状、顔料の付着状態を調査する目的で、マイクロスコープ撮影および絹糸の 3 次元計測を行った。そのほか近代日本画の画絹および絹本制作技法に関する資料を収集、調査した。 2023 年 9 月 20 日、21 日（2 日間） 「聖観音・不動二童子・毘沙門天三尊像」（嘉吉 4[1444]年）、狩野芳崖「三村晴山像」（制作年不明）、鉄翁「古木寒鴉図」（明治元[1868]年）、川崎千虎「彼得大帝像」（明治 9[1876]年）、荒木寛畝「鶏」（明治 33[1900]年）、川合玉堂「雑木山」（大正 2[1913]年）、山口蓬春筆「薄暮」（大正 7-12[1918-23]年頃）、松林桂月「晩秋」（昭和 16[1941]年） 2024 年 1 月 11 日、12 日（2 日間） 宋旭「天目垂虹図」（明代・万暦 17[1589]年）、柳沢淇園「瀑布図」（18 世紀中葉）、司馬江漢「二見ガ浦図」（18 世紀末頃）、椿椿山「春江遊魚図」（嘉永 3[1850]年）、狩野芳崖「暁霧山水」（明治 20[1887]年）、狩野芳崖「大鷲」（明治 21[1888]年）、小堀鞆音「武士」（明治 30[1897]年）、松岡映丘「浦の島子」（明治 37[1904]年）、松岡映丘「伊香保の沼」（大正 14[1925]年）、橋本関雪「玄猿」（昭和 8[1933]年）	
実績報告 ※プロジェクトを通じてどのような成果を得ることができたのかについて具体的に記載。 （500～600 字） ※別途、プロジェクトの実施状況や成果が分かるものを画像ファイルもご提出ください。 （必須）	本研究は繊維産業の発展に伴って画絹の質が大きく変化したと思われる明治から昭和前期の絹本作品について、年代によって絹糸や織り目等に段階的な変化が見られるか調査する目的で行ったものである。使用した機材は Hirox 社製 RH-2000、レンズは ACS レボズームレンズ MXB-2500REZ で、深度合成機能により 3 次元画像上で絹糸の幅・高さを計測した。絹糸は数本から数十本の繭糸で構成され、常に計測数値が変動するため、一作品につき経糸、緯糸それぞれ 20 本の計測を行い、最大値と最小値を除いた 18 本から平均値・標準偏差・変動係数を求めた。 助成期間中の２度の調査では、おおよその制作年が明らかになっているものを基準に作品を選定し、江戸から明治、大正、昭和への移り変わりを観察した。比較として、室町時代と中国・明代の画絹や、織構成が異なり絹糸も精錬されている絖本を調査した。時代を経るにつれ絹糸には繭糸の抱合が強い、丸みを帯びた形状がみられ、新しく導入された西洋製糸技術の影響が見受けられた。現時点では調査件数が少なく、また東京藝術大学大学美術館の所蔵品は東京美術学校開校後の明治 20 年代以降のものが多いため、機械製糸の普及と絹糸の段階的変化を追うには、それ以前の年代の作品も含めさらに調査を継続する必要があると思われた。そのほか本調査によって支持体の素地加工に由来すると思われる付着物や色料の年代的推移も確認することができた。	

※本様式に加え、補足資料として PDF ファイルや音声データ、映像データ等の提出も可。（必須ではありません）